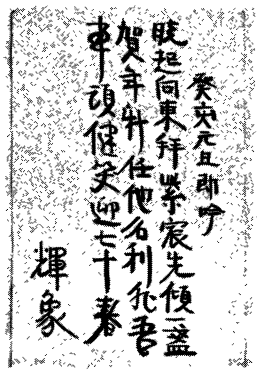
一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10－10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42－0211
定価　1部　100円
橋本清文堂

初代校長
富田先生



富田輝象書
大正十二年正月
に令息武彦氏に
あてたもの

母校の草創期と壮士富田輝象先生

廃藩後、明治五年八月学制が発布され、「自今以後華士族農工商及婦女子必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん」　との学事奨励に関する被仰出書が出て以来、幾多の変遷をへて、各県一校の県立中学、即ち、吾々の母校が誕生したのである。

この間、明治十四年七月石川県専門学校（後の四高の母体）予備科、同十七年十月同校付属初等中学科、同二十一年十月に県と大谷派の共立の尋常中学が開設されたが、同二十六年五月閉鎖となった。

（現在有る　頌　徳　碑）

この間、県政の空白状態があり、（二年間に知事の更迭四回）新規に赴任された、三間正弘知事は伝家の宝刀とも云える、原案執行権を発動して、同年七月五日県令第三八号を以って、石川県尋常中学校の設置が告示されたのである。

久しく生れ出ずべくして生れ得なかった、県立中学校は、県令告示と同時に、共立の中学生、一年一五四名、二年七九名、三年一九名、四年八名、五年三名、計二六三名を以って発足をみたのである。

五年生、新山、石田、中村の三氏が、第一回卒業生として、明治二十七年に巣立ちを致しました。

暫く空席であった学校長に、当時能美郡の郡長であった、富田輝象氏が任命されたのは、二十六年八月のことである。

先生は儒学・国学に培われ、短期間ながら、洋学の洗礼をうけられ、金沢士族としては、比較的進取性に富んだ、壮士であったとか。

維新の変革に立ちおくれた一金沢士族として、士族結社「忠告社」の一員でもあったが、先生は新権力につながる官僚特権か旧藩士の救済事業か、との迷いもあった。征韓論、大久保暗殺の紀尾井坂事件に対して結社同人に、先生は終始私情をすて正論を主張され、又、十六年に北海道開拓事業（士族救済）に参加の為、官職を捨てた事もあった。

校長としての輝象先生は、眼光烱烱とした壮士的風貌の持ち主であった。しかし、当時としては進歩的であり、努めて私塾的な形式に終始して、魂のふれあいの場を求める様に努力された。

その生活態度は常に野人的な壮士振りを発揮し、酒を好み、自作の詩を吟じて楽しむ風情があったとのことである。

因みに、藩祖前田利家公の桶狭間の合戦の武功を、次の様に読んでおられる。

鞍横驍将首　鮮血濺戦袍
誰識三州地　槍頭半段功

などは、壮士富田輝象校長の面目を遺憾なく示したものと云えよう。

日清戦争前後四年間、奉職された先生の銅像（昭和三年七月建立）が昭和十八年九月大東亜戦争の際、時局の要請に応えて供出されたのも、奇しき縁とも考えられる。

終戦後、昭和三十年、初代の一泉同窓会長英安吉氏等の尽力により、親しく先生の謦欬に接した。本多政樹先輩の揮毫になる『公心巍然』と刻した頌徳碑が、同年四月に建立された。

（この史実は泉丘高校蔵の資料によるもの）

「一泉」第五号によせて

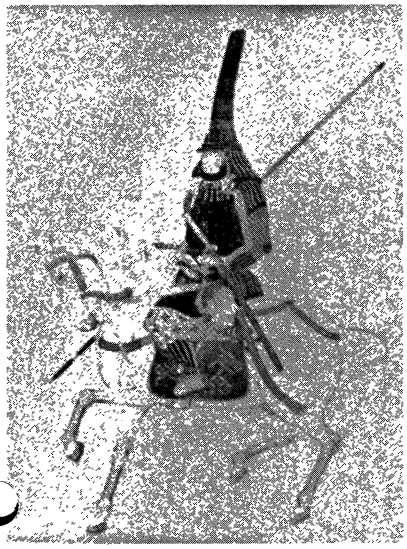
泉丘校蔵書解題目録の編集を終えて(2)

山森青硯

○前田利家肖像軸　一

泉丘校に軸止に「前田利家肖像」と墨書した一軸がある。落款は「源幸筆　源昌謹写　印」とあり、70糎×122糎、「石川県立金沢第一中学校」の蔵書印がある。一中目録には第五部五類　山本光汀画　五五〇　明治42・9、と所載。「金沢一中泉丘高校七十年史」一四〇頁に其の全容を掲げ左記附記がある。

藩祖武功図、前田利家の桶狭間の合戦におおける奮戦ぶりを描いたもの毎年六月の寄宿舎武道大会の際に掲げられた。



とある。此図は県工の図案絵画科の先生山本光汀（本名昌）の模写されたものであろう（鏑木勢岐氏談）図柄は、前田利家公大鯰尾の兜をかむった馬上勇姿である。

按うに藩祖前田利家公（桶狭間）大鯰尾の肖像画は珍品であり、筆者管見本軸が始であり終りである。大鯰尾の兜と云えば、すぐ様末森の陣を思い出さる。（尾山神社絵馬堂に掲る利家末森出陣の大額＝小松砂丘氏川辺御楯筆画の模写）山本画師は原本なきに、明治四十二年揮毫されたことはあるまい。筆者色々資料物色している内に、明治三十二年四月宇都宮書店刊和田文次郎著「前田利家公」巻頭写真に、一中画軸と寸分たがわぬ利家肖像（白馬首一つ）があった。

左脇に「桶狭間合戦に於ける前田公の勇武」とあり、同書凡例に「本書の冠頭に画ける所の公が桶狭間合戦に於ける図は石川県工業学校に蔵むる所のものに拠る」とある。依って山本画師の原画が県工に蔵していたことが解った。今や利家を語るものは悉く利家大鯰尾を即（そく）末森戦と結びつけている。史家和田文次郎は此のことを未知の筈はあるまい。「加賀文化」第六号に、氏家栄太郎氏が「前田利家公桶狭間凱施図に就いて」と題し

嘉永元年戊申陽月（金谷武英）

高徳公桶狭間凱施図記（代長連孝黒本植）

・高徳公桶狭間凱施御肖像（黒本稼堂）

右三項目によって述べられている。いずれも白馬に召され、兜を後にかづき、頭を白布にて包む。血じゞみ、矢三四筋兜の背から腰の辺に立ち、鞍の塩手に首四つ、槍の身に白髪首一つ貫き、馬にも矢二三筋つゝさっている。大鯰尾に首一個の絵一品もない。然かも水戸、熊本辺の画師ばかりであった。前記金谷武英氏書巻末に、

命臣金谷武英記其来由臣武英謹閲

公家系譜豊官庫牒籍　国祖於桶狭間敢戦載無不詳只如此所図者一無所見是甚可疑然元和以降昇平已久諸家珍蔵記録日著也焉知不有此図所據在其中乎今姑録塩田華之辞以備後考顧於

国祖赫々盛蹟何啻菅豹一斑乎哉

嘉永元年戊申陽月臣金谷武英謹誌

とある。碩学金谷武英ですら、永禄三年（一五六〇）桶狭間の様相不詳と述べている。孤本泉丘本が正か、他本誤か、史家に課せられた大きな課題であろう。筆者知るものとしては、

佐々木泉竜画（野町二丁目坂井正雄氏蔵）

宗信画（博労町七八小島忠義氏蔵）

がある。黒本稼堂先生は其著に

今余が所蔵の幅は熊本に於て獲たる者なれば、同藩士の需に応じて應成の写ししものなる事疑なし。かくの如く他藩に於ては、此図を写さしめて、以て五月の端午にかけて男の子たるものは、皆犬千代

になれと口々に唱へてその子の武勇を養ひ来りしものなるに、其本家の我が藩に於ては却て金谷武英の記文に云る如く、此の図に描ける者の如き一も見る所なしとは、いかなる事にやあらん。当時藩士の怠慢是にても知らるべく、且又加賀藩士と云へば、唯弱き者と諸藩に侮られしも故なきに非ず。

とある。又黒本氏談として

「勤暇閑燈録」によれば図は水戸家に出ず。長連孝氏の蔵幅は長州人に愛せらる。又余の蔵品は熊本に於いて購ひしもの、此の様に他藩に於いて犬千代公勇武を称せしに本家の加賀藩には一つもなし。（金谷武英記文）口惜しき次第也。

とある。よって、県工山本昌氏にいづれかの原本を写さしめたものか、此種の藩祖桶狭間画は兜を背にかつぐ例となっている。大鯰尾と首一つの図は此軸（泉丘本）一点であろう。

筆者県工原本未見のため何も云えない。大方の御叱正を乞う次第である。

金沢泉丘高校蔵 善本解題目録と 編者山森青硯氏

北村 魚泡洞（大正十三年卒）

泉丘高校は明治二十六年に金沢一中・泉丘高校の前身である石川県尋常中学校が創立されてから今年で八十八年を数えた古い由緒ある名門である。この学校に昔から高級な典籍が保存されていることを知っていたが、校舎の移転、戦争等による混乱のため散佚したのではないかと憂慮していたのだが、今回立派にその全容が我々の眼前に現われたのである。一冊を入手して飛びつくように熟覧したことは申すまでもない。その喜びの余りその内容の一端を紹介したい。

㈠ 概 要

本の大きさはタテ二五・五cm、ヨコ一八cmあり、本年一月一日発行、編集並発行は石川県立金沢泉丘高等学校、題名は「金沢泉丘高等学校蔵善本解題目録」。まず見返しは前が「墨子」、後は「元亨釋書」から各二頁ずつ採録して用いてある。図版は巻頭にカラー写真三葉、黒刷十二頁、巻中に蔵書に押捺の蔵書印をすべて蒐録してカラー写真二十四頁に収めてある。全三百九十一頁の浩瀚なものであり、ずっしりと重い。編者は山森青硯氏。

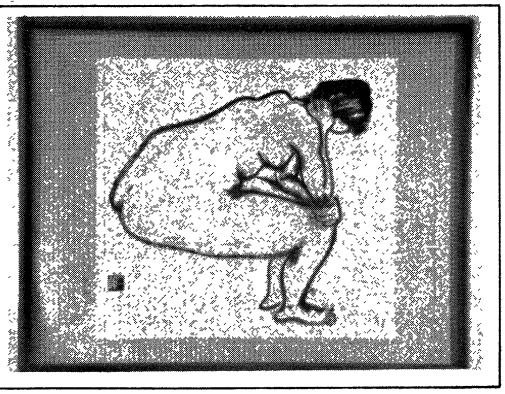
内容は①序文四氏②貴重本書影③序説（山森青硯記）④蔵書印譜⑤貴重本解題⑥善本解題、和漢書の部、欧文書の部⑦編集後記⑧索引から成る。善本の部は大きく①唐書②和漢書③英文・地歴、数学の外来教科書に分類し全書名を列記し解題が付されている。貴重本四十八部は和蘭字彙（安政版）、元亨釋書（慶長版）、孝経衍義（清版）加賀藩蔵版欽定四経（嘉永版）など眼がくらむような稀観書で今日絶対に入手できそうもないものばかりである。それを一々刻明に解題するため編者山森氏の書誌学上の知識をおしみなく投入されたのである。ことに加賀藩蔵版欽定四経についてはは特に十頁にわたって解題がほどこされている。

㈡ 道士、山森青硯さん

著者をよく見ることにより、その著書がよくわかる。編者山森氏はこれ迄に青硯双書と称する著書が十数冊に上る。頼まれて執筆された小稿は数え切れないほどある。ことに英学史の研究には独特の境地を拓かれ、書誌学者としての令名はすでに高い文化功労者である。今回の泉丘校本はこれらの蘊蓄を傾けて作られたもので、山森氏を措いては誰れも敵わぬ業績である。

以上、今回の善本発刊に際し、いささかご紹介したが、ただ惜しむらくは印刷部数が少く希望者の渇を医するに十分答えられないことである。止むを得ないことで官版にありがちな物足りなさを感ずるものである。

（石川郷土史会会誌第十四号より）



桜美会員 川村 二郎氏（泉18）

同窓の随想

夏の一日

野市他作
傘寿末
（一中二十八回卒）

念仏傍題にお朝事が終ると二時間程読書に耽る。今机の上には、大鏡、増鏡一冊と、方丈記、無名抄が開いた儘に人待顔である。でも何巡目かの黙読乍ら頭に残って居ないから、其の都度楽しむのに世話がいらず。古文書の訳本だから受験勉強の様な気分になるのも無碍でない。やがて自由時間ともなれば、散歩や、古墳の松林で詩吟を楽しみ、蟬の声に耳を澄ましたりする。別の日にはゲートボールの練習が正午迄続く。

午后になると何かを見たり、考えたり、句の摸索に耽ったりする。又土用稽古ではないが、三時頃から約一時間例のゲートボールを行る。一汗流すと睡眠が良い。先日も百人一首を金繰り出して後から近所の人に笑い話を聞かれた。母の遺物の女訓玉文庫のお蔭だ。

五時ともなれば洗濯物のアイロン掛けを始める。最も、タイミングが合わぬと二三日横着するも宜である。

老松会（五十名）には努めて出席して居る。月曜‖詩吟、謡曲。水曜‖全体会議。金曜‖婦人部手芸。土曜‖ゲートボール試合。中々小忠実に忙しい。買物には大抵中央マーケットを廻って事足りて居る。鶴山台団地は、一万六千の静かな自治のモデル地区に成って居る。元々信太の森と言った、史上白孤で有名だった所で、周りには千塚古墳の松の小山が点在して居る。大規模の道路が出来たりすると古代民族の土器などが出土して京都博物館に送られて居る。古代史を辿ると尽きせぬ趣味感が湧いて来る。室から西を俯瞰すると、五つの市、（和泉市、堺市、高石市、泉大津市岸和田市）が大阪湾岸を建てこめて淡路島が大型船の往来を宿して明石海峡を扼し、六甲山が浮出て来る。遙かに紀淡海峡を望む事も稀ではない。夜に入って「分譲の庭前を通ったら葉裏の揺れに瓢箪が熟って居たよ。」と電話があった。甚平引掛けで飛び出した。形の正しい瓢箪が月映で寧ろ凄い程だった。

にょこふくべ薄化粧さえ鎌の月

終り

白いゲートルの青春

小坂政一
（一中二十七回卒）

私は一中大正九年の卒業生である。その頃校舎は本多邸に続く長い土塀の中にあって、前田藩時代の本多の森を背にし、通りを隔ててグラウンドがあった。（現在は観光会館が建てられている。）

そこで必ず週一回の軍事教練が行なわれた。黒の詰襟、金釦の小倉の制服、両脚に釦付の白いゲートルを着用した。教練の前に服装の点検があり、釦一つ落ちていてもシゴキを受けた。銃は村田銃、帯剣は庖丁のように幅が広くて膝の下まであった。明治十年西南戦争に使われたしろものと云われた。号令一下、重い銃を前方に捧げると「軍人勅諭」の奉読が始まる。カニという渾名の背の低い教官の奉読が五ヶ条だけに終る時はホッとしたが、時には全文を奉読して途中読み違え、読み直されると皆ゲンナリして、終る頃には生徒の銃はだれ下がる。教官は奉読中にも之を見付けていて、あとで銃をひったくり、銃身で頭を叩かれても、その頃の生徒は一言も発しなかった。

漢文の学科を担当されたF先生は生徒数人に教科書を素読させたあと、自分もその文章を流暢に読まれた。或る時、前の席の生徒が気が付くと先生の教科書は逆様であった。驚いたことに先生は教科書全文を暗記しておられたのである。

試験の時、F先生は教壇前の椅子に掛けて新聞をひろげ強度の近視鏡をかけて読んでおられた。若し生徒がカンニングをしようものなら、矢庭に立ち上って摘発された。全く名人芸である。新聞を拡げ乍らどうしてカンニングがわかるのか、その新聞には小さい穴が沢山あけられていたという。（これは伝説）

さて校門の前に「学校祭」の看板が立ち、年一回の機会とて平素女っ気一つない校内にも父兄や女学生の姿が溢れた。各教室の展示、飾付けは勿論のこと、呼び物の演芸会場は丘の上の武道館で、映画上映の会場もあった。

演芸館では、舞台の袖から両方の手首、足首、腰などにつけた色とりどりのリボンをヒラつかせ、身体全部を褐色に塗った大男、見れば応援団長ナッパこと黒田君がスパニッシュダンスと呼ぶ怪しげな踊りで舞台狭しと跳躍し、皆呆気にとられ、はては抱腹絶倒の拍手喝采となった。次は浅草オペラ張りの喜歌劇、舞台

はカフェーの情景で、高い白帽のコックとエプロンの女給姿に扮した生徒達が一列に並んで、床踏み鳴らして唄う。田舎者の禿頭の爺さんも出てきて「鬼のいない間に命の洗濯々々」今年が最後の五年生のメンバーは声を限りに踊り歌い、次は史劇「ジュリアス・シーザー」の上演、黒田君、松本君、八幡君らが、茶色や紫色の衣裳をまとって玄人はだしの演技で一中健児の真骨頂を見せた。

その年の学校祭に、私の家内はまだ一高女の一年生の時で、初めて一中校内にはいり、展示品を見て歩き、演芸会場でゆっくりと見物したことを憶えていて、青春を謳歌する若人の熱した雰囲気に時の経つのも忘れたと云う。あれから激動の世を越えて六十数年の歳月が経過したが、老夫婦互いの思い出の中に、あの日の光景は鮮明に生きている。

（一九八二・二・七）

母校の発展を

大野正己（一中二十八回卒）

只今は「一泉」会誌の第四号を贈呈して頂き誠に有難う存じます。私は大正十年一中を卒業し早や六十年を経ました。本多町の旧母校の姿と一頁の厳霜碑の写真を眺めて思い出しています。五年一組の教室はこの碑に最も近い二階にありました。卒業して金沢高工、応用化学科に入学、卒業と同時に助教授に任ぜられ、教授を経て住友に入社、日本板硝子研究課長、住友原子力㈱事務局長、ゼネラル㈱常務、金沢工大教授を経て七十六歳で退職して目下暖い南海の当地で余生を楽しく暮しています。桜章校の一中で学んだことを誇とし、後輩の活躍を祈っています。応用化学を専攻し、東北大で学位を二十五年前にもらいました。エネルギー工学が専門ですが最近は原子力工学と環境工学を中心に勉強しています。

二十歳―三十五歳までが人生で一番大切で、大いに勉強して下さい。それには健康が必要ですから高校在学中は体力をつけて下さい。

今後、一泉同窓会の益々の発展を祈ると共に泉丘在学生徒の奮起を望みます。

一泉短歌

旅の歌

第三十二期　赤井直恭（朝日社友）

富士山と身延山

精進湖に　影をうつしてそびえたつ
五月の富士の晴れ姿かな

身延山　日蓮修業の跡にたち
富士を眺めし五月の朝（53・5）

佐渡

佐渡おけさ　かすかに流れ漁火が
遠くまたたく相川の宿

陽は落ちて　流人の墓に線香が
細く流れる八月の佐渡（53・8）

京都

時雨きて　烏丸通りに雨宿る
聖そばやに琴の音きこゆ

ゆりかもめ　羽音ならしてとびゆけり
加茂川の朝冬日まぶしく（54・3）

伊勢神宮

神宮に　特別参拝ゆるされて
厳かにふむ玉石の音（55・4）

インドネシア旅情

大いなる　木の葉がバサと地におちて
常夏の海に秋近きらし（バリ島）

壁にはう　親子の守宮ちちと鳴き
ジャカルタの夜は静かに更けぬ
（ジャカルタにて）（55・7）

シンガポール

港見える　シンガポールの丘にたち
夕陽を浴びて戦をしのぶ（55・7）

香港旅情

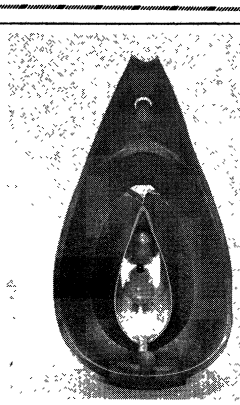
窓ごしに　浮かぶ灯の海酔うほどに
老酒よろしき春の夜なり

道とへば　中国語のみかへりきて
ネオンの塔を指さす少女（56・3）

深圳

ビザの列　長くつづきて赤旗の
なびく駅舎に大紅花燃ゆ（56・3）

おそるべき　華僑の力香港の
中のイギリス色褪せにけり



二紀会35周年記念展
「女は海・祈り」
堀　義雄氏（一中四十二回卒）

死にいたる事件

関　暢（一中四十一回卒）

少年非行の問題から殺傷事件まで取沙汰される昨今の世情である。六五才の私はただ驚くばかりだが、回顧すれば私の一中在学中にも傷害致死が二件あった。現代の中学生殺人と共通点があるのか、それとも異っているのかは読者のご判断にまかせて、五十年前の淡い記憶を略記してみる。記憶違いの点はご寛怒願うとともに、不幸にも早逝された両氏のご冥福を祈るものである。

祭礼の夜

昭和六年、私の同級の三年生Aが金沢市尾山神社の春の祭礼の夜、他校生Bに心臓を刺されて死亡した。

新聞は事件の発端を「女学生をめぐる無邪気なやりとり」と記述したが、その十日ほど前近くの尾崎神社の祭礼の夜、Bが神社の境内に入ろうとすると、門の付近にいた女学生連が制止した。Bが何かやり返すと、女学生のそばにいたAが「生意気いうな。やるかッ」と威丈高になったという。Bはその場は引きさがったが、仕返しを決意し、十日ほど後に尾山神社で逢ってAを誘い、尾崎神社近くの暗い道でAを刺した。ほとんど即死だった。

Aは金沢市立松ヶ枝町小学校では私より一年上で、少年野球全国大会に活躍し、一年下の東正義投手と組んだりして名捕手の名をうたわれた。学校では物静かな言動で大人の風があり、この奇禍は意外だった。

応援団の練習

ピカピカの一年生がやや学校に馴れたころ、金石の角力大会にそなえて応援歌の練習が始まる。練習のある日は、本多が森の正門と裏門に応援団幹部が立ち、サボる下級生を見張る物々しさである。練習中に下級生が歌わなかったり、笑ったりするなど態度が悪いと、幹部のビンタや旗竿がとぶ。

昭和五年のことだったと思うが、三年生のIが幹部のUに頭を旗竿でなぐられた。私は当日サボっていたが、Iは頭をおさえて「痛い、痛い」といっていたという。その場に倒れるとか、泣き叫ぶということはなかったらしい。

即日医者にいったのかどうか、しばらくして大学病院へ入院し手術を受けて、「経過良好」と朝礼で伊藤校長の報告があったりしたが、全治にいたらず、良くなったと思えば、また悪くなり、相当の月日を経過して、ついに亡くなった。

むずかしい病名だったし、旗竿との医学的な因果関係も私ども下級生にはわからぬ。新聞にはでなかったと思うが、警察沙汰になったかどうか、学校がUを処分したかどうか、全く記憶にない。

Iは品のよい都会的な感じのする人であり、一方のUはユーモラスな面もあって下級生の人気があった。ハズミとはいえ、まことに不幸な事件であった。

四十六期報

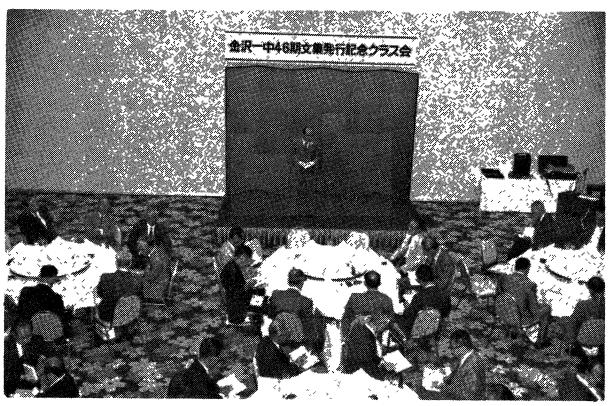
「厳霜烈日」文集上梓

太田定夫（一中四十六回卒）

とにもかくにも記念大文集が出来あがった。これはまた大変な本になったものだナ。

昨年十月二十三日金沢国際ホテルで開催された「卒業四〇周年記念文集発行記念クラス会」に出席の六十二名のクラスメート全員が、受付で渡された文集の重みに、自分らの人生行路の長かりきことと、クラス会の団結の強さをあらためて思い知ったのであった。

本冊四〇〇頁。別冊一五〇頁の珠玉の大文集。



一中卒業で袂を別ってより四〇余年の歳月の隔たりが、各人の歩んだ夫々の道程の多様さと、苦労研鑽の大きさを窺い知らせてくれるのである。

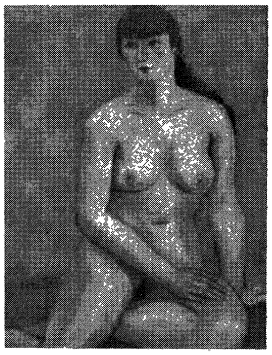
会場では編集発刊の功労者「村井又兵衛君」「坂木敏雄君」にクラス会よりの感謝状が内田一君より手渡され、偉業完成に対するクラス全員の感謝の気持が伝達された。

尚、副題にもあるボーイズビーアンビシャスの言葉は一中在校中「西村精一先生」が桜咲く本多町校舎校庭で新任挨拶に用いられたクラーク

博士の名言であるが、多感な当時の若人の胸にいかに感動を与えたことか。「言葉は生きている」のたとえ通り還暦を迎えた四十六期生の心に今なお、この言葉は生きつづけているのも意義深い。

本文集には「西村精一先生」の特別寄稿を巻頭に飾ることが出来たが、惜しむべし、文集上梓後程ない十一月二十九日京都鴨川べりの自宅で心不全のため七十五歳で先生は永眠されたのである。

先生は最後まで枕頭に本文集を離されなかった由。謹んで御冥福を祈る。



桜美会員
大蔵　吉夫氏（一中47回）

呟き言

坂野雄一（一中五十四回卒）

所持文庫本良寛詩集の復刊は奥付を見ると一九七七年九月である。長い病院生活の挙句の果てに手術を受けたのが同年八月、個室を次の重症患者に明け渡した折も折とて、雑居病室の騒音防止と雑念排除に此の一冊は随分と役立った。病院の滞在期間が長い程、気が紛れるから本来大部屋に限るのだが、其の代り周囲の喧噪を何等かの方法で防ぐか、或いは其の中へ融け込むかしなければ所詮身は持たない。それで当時は専らヘッドホンを着用に及び雑音を締め出すと同時に、ラヴェルとベートーヴェンと青江三奈と渡辺真知子を聞きながら良寛詩意訳に没頭していた。文庫本詩集は手軽で余白も多く、ベッドの上での書き込み作業には適していた。此の試みは、全くうまく病院の日々の痛くて辛くて憂欝で不愉快で退屈で長ったらしい時間の重圧から開放させてくれた。とは云っても注射と回診と検査、まずい食事と早い消灯などからは、無論逃がれらるべくもなかったが——。

考えように依っては其の様な時間の流れに身を委ねないと、人間滅多に詩を読んだりする機会は摑めまいから、今も其の頃を一概に疎ましく思っている訳ではないが、かと云って嘗ての病褥の日々に戻りたい等とは夢にも望んでいはしない。詩など読めなくても、書画など書けなくても、健康で平穏無事がいいに決まっている。が、或る短い期間——当時決して短かいと感じていた訳ではないが——社会の修羅場からふと降りていて、云わば横から眺めてみる人生も、己れ自身の人生も含めて、又仲々の景色ではあった。昔日の己れの影の種々相が、万華鏡の様に多面の鏡に映し出されて只々唖然とするばかりであった。

そして或る時、今迄漠然と読み過ごして来た一句に思いを到して愕然と佇んでしまった。曰く「五十而知四十九年之非」。或いは病に臥せていなくても齢五十にも達すれば誰でも四十九年の非に気付くものなのか。只、四十九年の歳月の内の非なるものをのみ後悔しているのではなく、四十九年総てこれ非と認めれば、つまりは此の時点に於て価値の全面転換が起こった訳で、されば昨非なれば今日是なるものは何か。これは良寛さんにとっても重要な一主題であって詩の中でも繰り返し繰り返しそれに触れている。人間の是非看破に飽く、是非定端なし、是非始めより己れにあり、と。

然し、此の辺り言葉は簡単だが、気どりも知ったかぶりも胡魔化しも通用せぬ己れ自らの魂の問題であるが為にそんなものばかり身にしみついている現代人にとっては意外と難しい。

少くとも千年も前はそうではなかった。溢れ出る己が魂の動きに素直に順応して充分な人生があった筈である。其の意味では、肝腎な処世の根本思想は古今東西不変だと云えようし、此の様な問題意識を持たねばならぬ程現今の人間の生き方は狂って来たとも云える。生きようとする人間の欲求・目的と其の手段・方法が合致しないのだから、随分と自ら住みにくくしているとしか思えない。

同窓の集い

◇金沢一中三十二期 秋のクラス会（関東）

金沢一中第三十二期秋の関東クラス会が、昭和五十六年十一月十六日午後一時から、松林幸雄君のお世話で東京・柴又の料亭「川甚」で開かれ、初冬のひとときを楽しんだ。この料亭は百年もつづく老舗で漱石などの文人がよく集まったところ。

会するもの左の八名。まずお互の健康を祝し、金沢の思い出や旧友の消息などを語りあった。

当日は好天に恵まれ文字通りの小春日和、「川甚」の座敷から見渡す江戸川の風光をめでつつ、名物の川魚料理――鯉やウナギの珍味に酒のまわりも早く、みな上気嫌のうちに四時すぎ再会を約して散会。帰途、一同で帝釈天（題教寺）に参詣、法華経説話に由来する有名な彫刻を見学した。

来年春の集りは泉谷弥一君のご尽力で江ノ島か藤沢でひらく予定。

（赤井直恭記）

【出席者】　泉谷、中村、柴田、北村、春日、松林、下村、赤井。

金沢一中「三七会」の集い

本多の森に別れを告げて早や五十年。これを機に毎年三七会全国大会を催している。

昨年九月、三度目の集いを和倉温泉で開いた。竣工間近かな能登島大橋の見える温泉浴槽の中で、昔のその儘の金沢弁で「オイ、オマン、遠いところをよう来たな」「なんでカアチャンを連れて来なんだがいや」から始まり、三回目からになると、昔話の繰返しもさることながら、酒の量も前回に比べると激増「一升五合の大盃の鯛のコツ酒も三杯がみる

みる中にカラッポ。例によって、なん重唱かわからぬ校歌や応援歌の応酬で夜が更ける。久し振りに往時の童心にかえった宴となる。

翌朝には若いもの顔負けのゴルフ組、殊勝にも夫婦で出かける墓参組、能登観光にと、つれ出す連中で別れを惜しみ、次の再会を約して宿を出る。旧師の宮沢先生を始め同伴者を含め総勢三十八名の盛会であった。

（昭五卒黒田記）

一泉桜美会 第九回美術展ひらく

絵で結ぶ同窓会として一般美術愛好者にまで親しまれている桜美会展が、去る十月八日から十三日迄大和百貨店八階文化ホールにて開かれた。

今回は全国でも数少い刀匠、桜美会々員の隅谷正峯氏（昭和十三年卒）の重要無形文化財日本刀技術保持者認定の祝賀をかねて会員一一〇名の全員出品の豪華展として催された。

会期中は一泉同窓会員をはじめ多数の入場者で賑い、旧師の宮沢先生を中心として受付を担当する会員も終日大童の態で応待にあたった。

なお会期中の十日夕方より「人間国宝」隅谷正峯会員の祝賀会を有志にて盛大に行った。

（桜美会事務局　斉藤記）

振りむけばアレやコレや
―六桜会五十周年大会

（昭和六年卒）

〝卒業五十周年〟は、節目としてやはり大きなものであった。

法事でも五十回忌といえば最後のお勤め、大会の案内を受けた友は、それぞれに一期一会の感慨もあってか、よく集ってくれた。

金沢の近くにいながら、全然寄りつかなかったのが、翻然、五十年振りにバツが悪そうな顔で出てきてくれたのも、この節目の重さのせいであろうか。

「振りむけば愛……」なんていうテレビのコマーシャルがあるが、この半世紀、振り向けば愛なんてものでなく、ことに昭和六年、一中を出てから終戦までの十五年は、喜怒哀楽のすべてを、それも度のきついのを否応なしに味わされた狂瀾の時代であった。

〝これでわが一巻も終りか〟と覚悟を決めるような目に、二度や三度は遭ってきただけに、それからのなりわい、歩いた道はさまざまではあったが、運の強さと娑婆の縁、お互い今日まで生きてきた人生をいとおしむ想いもひとしおというものである。

大会は中秋十月の初め、先ず同期の内田隆元君が住職の蛤坂妙慶寺で、物故者八十三君（内戦死六名）の追悼法要のあと、山代温泉旅館で開宴。毎年この会に出て下さる鏑木、宮沢先生と、さして変らぬほど老化の激しい新顔もいて、少年の日のイメージと重ねながら、互いに見合す顔と顔、ああ光陰は矢の如し。話題が二十年、三十年と飛んだり戻ったりするのも、同窓会ならではの楽しみであろう。

当時の金沢一中は、官公吏、軍人、教職者の子弟が割合多かった（同期では一九一人中三六人）だけに、転校生も多くいた。途中から入ってきて二、三年でまた出ていく人もいた。思い出も馴染も薄いこの会なのに、案内さえあれば欣然飛んで来る、こうした友らの心底にある〝懐しさ〟とは一体何であろう。

私は一つには、金沢の町と人のホスピタリティ（もてなし心）の良さではなかったか、と思う。粗衣、粗食、概してハングリーの時代であったが、それをカバーして余りある心づかいがあった。肌身に感じた青春の回想は忘れ難いものであろうか。

山代の一夜で五十年の名残りは尽きず、第二日は那谷寺に詣り、母校を訪ね、本多町を通って卯辰山を一廻りするバス旅行。兼六園脇の料亭で中食、散会となったが、別れがてなる遠来の友は、余生幾許もない六桜の集い、まだまだ続けよう、金沢に世話ばかりかけているから、次回は東京でやろうと衆議一決する仕末。女房と畳は新しいほど……というが、友は古いほど良きものである。

（永井正三記）

同窓会本部へのご協力

当同窓会の活動資金として、左記の方々から夫々ご寄附をいただきました。茲に厚くお礼を申し上げます。

鏑木　政岐氏（二十七回）
北村魚泡洞氏（三十一回）
大野　正己氏（二十八回）
関西八泉会（泉八回）

金沢春模様

作詞　野本　正作
（泉六回卒在東京）

一、水もぬるむか　犀川の
友禅流しも　なつかしや
思いみだれて河岸の
乙女心も　ゆらゆらと
誰に散らそか　花模様

二、緑をうつす　浅の川
紅殻格子の　街の灯も
ぬれていとしや　春の雨
しのび待つ夜の　さかずきの
心にしみる　三味の音

三、兼六園の　月明り
加賀宝生の　つゞみの音
高くはずんで　空を打ち
低くひゞいて　地をたゝき
笛の音あわす　松の風

◇八桜会全国大会記

金沢一中四〇期生の全国大会が昨年九月十三、四の二日間、箱根小涌園で開催された。

一中を出てから四十八年振りの再会者もあり、金沢勢十二名を加えて三十二名が集った。

ジョークとユーモアを混じえた自己紹介にはじまり、福田君の開会の辞で開宴に移る。

「幾山河越え来しわれら友がらが箱根に集いて今宵若やぐ」

学友の歓喜は歓談、抽籤、校歌の高唱の中に最高頂に達した。次期の大会は金沢で開催することを決定し、川島君の音頭で万才三唱して幕を閉じた。翌日は全員観光バスの箱根観光に参加。強羅を経て名山早雲山を越え眼下に大涌谷の噴煙を俯瞰し湖尻桃源台にいたる。箱根町での昼食で空腹を満たす、揃って食べる会食も楽しいがこれが又しばしの別れの食事と思えば淋しくなる。やがてバスの最終点小田原。一人ひとり堅い握手に別れを惜しみ、金沢での再会を誓う。

（谷内　上記）

一中四十一期生（昭和九年卒）関西大会

五十六年は関西在住の赤崎、小泉、三浦、八十島の諸兄が世話人となり、十一月十一日、十二日の両日、晴天に恵まれた錦繍鮮かな秋蘭の京都で、三十一名が集まり関西大会を開き、益々友誼を深め合った。

金沢地区の参加者はかねての打合せの通り早目に京都へ着き、嵯峨野めぐりをして〝わび〟を楽しむ積りであったが、余りの雑踏に辟易して早々に会場の嵐亭に引き揚げた。既に関東、中京よりの参加者も到着しており、一風呂浴びて懇親会と相成った。会場の嵐亭は嵐山、桂川に沿い京都有数の風光明媚、静謐なたたずまいの処。京美妓のサービスを受けて気分も雰囲気も最高潮の一夕を過ごした。翌朝八時半デラックスバスで出発、京都随一の紅葉の名所高尾の高山寺を散策し、茶店の甘酒をすすり、清滝川の清流に心をなごませた後、車を転じて洛北の大原三千院へ向った。途中聖護院横の京風そばで有名な河道屋で〝そばすき〟を賞味したが、味はさすがであり、又河道屋の古風な門構えと露路風の前庭が印象に残った。三千院はこれまた全山紅葉に映え、すばらしい眺めで、深まりゆく秋の京を心ゆくばかり楽しみ、名残を惜しみつつ京都駅で散会した。

（牧沢記）

◇十桜会総会

昨年十月十一日昭和十年卒業の十桜会総会が熱海「起雲閣」で盛大に催された。

金沢よりの夫人同伴会員を含めて五十名が一堂にそろい、とくに恩師の藤田、斉藤、後藤の諸先生のご参加を得て一段と盛り上りをみせた感があった。総会は互いの懐古談に花が咲き、友の消息を知り合い、又の会える日を期して別れを惜しみ、夜の更けるのも忘れる有様であった。この総会で記念会誌が各自に配られ唯一のお土産となった。決議として母校の九十周年行事として発行される会員名簿には消息不明会員を皆無にして互の誼を深めることを決め、又病気療養と体調を崩している二十三名の会員の加療専念を祈ることとした。

尚、今度古沢会長、坂本副会長が辞任し地元金沢の梶川欽一郎君が出席全員の賛同の許に会長に就任することとした。

（古沢英雄　記）

◇関西金沢一中四十三回同窓会

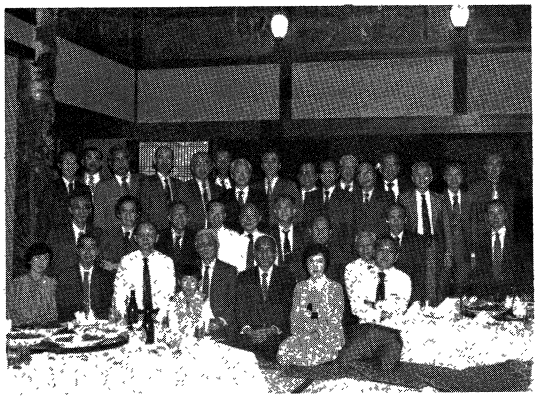
2月23日夕大阪北区「銀平」において関西在住43回同窓会が同期の中川憲治氏の阪大教授定年退官慰労を兼ね、第12回集会を持った。折悪しく前田藤治氏が風邪で欠席となり全員参加とならなかったが、中学時代の仲間に帰り楽しく愉快に盃を交わしお互の健康を祝し合った。次回は7月初旬小豆島に足を延ばし一泊することを決め散会した。

出席者＝大阪・加茂野弘、中村於外男、中川憲治、竹内豊八、真館一郎、神戸・上田三男、水上慎、京都・北中善雄、長岡寛厚

（長岡記）

◇47期東京大会盛大に開催

昨年の四十周年記念大会に引き続き本年は十月十日東京で開催。目黒雅叙園に同伴の奥様方を入れ三十一名集りました。国語の長谷川秀治先生を囲み話はつきませんでした。又、新しい試みとして那谷敏郎君には「印度文化」を、鉾田太郎君には「国防」について語っていただき、大変有意義な大会になったと思います。この次は加賀の温泉郷でお互いに元気で合いましょうと誓いあって楽しい一夕を閉じました。（中野　記）



一中四十九期同窓会の記

「あかあかと
　日はつれなくも秋の風」

残暑の九月十一日、あわただしく集合をかけたのであるが、市内の二十数名の予定が四十名も集り、小川氏経営のたか合は、二ヶ所に分れてのにぎやかな会合となった。当日になり四名も追加となり幹事は空酒のみの状態であった。

あけて五十七年は私達が昭和十七年に校門を出てより、四十周年となるのでその準備会でした。そして遠来の友をねぎらい、新しく会長に石川元一氏（野町にて耳鼻科病院開業）を選出し、解散した。

尚、四十周年記念懇親会は次の通りです。

日時　昭和五十七年八月十五日（日曜日）午後三時より

場所　山中温泉聴泉閣にて
「山中や菊はたをらぬ湯の匂」

備考　宮沢外与治先生、東正雄先生も御出席の予定です。

尚、参考に同期生名簿上一五九名ですが、消息不明が七名、掌握数一五二名（九五％）印刷物発送一四七通、返事あり一二〇通（有効率八一％）

当日の出席者（56・9・21）順不同

釣谷利夫　石川元一　小川忠男
千田　実　斎藤弥吉　山川俊夫
岡田虎二　北川　孝　中島正雄
南　平吉　坂尾重光　石野嘉男
加賀谷一夫西村　進　加藤健一
西井義隆　小原幸雄　前田精行
板倉　淳　尾戸嘉博　橋本外清
山村義一　待田　薫　豊島嘉己
石崎弥一　喜多国夫　大村　孝
竹林良雄　橋場一之　上野方弘
荒川　正　宇野良一　宮崎正孝
藤井　明　宮城　正　八木秀夫
邑井慶治　北出　寛　岡本欣三
笹賀清一
計四十名

（斎藤弥吉記）

金沢一中56期 金沢泉丘2期　関西大会

関西在住の一中56期・泉丘2期卒の関西大会が去る十一月二十一日、大阪南道頓堀の「くいだおれ」八階で開会した。

中央に校章を染め抜き、一中56期・泉丘2期同窓会関西支部と銘打って染めた同窓会旗を正面中央に掲げて二十名の参加を得ました。蜷川の司会に始まり、前回会合以降の関西会の動向の発表に移る。

山田武司（オーミ・ジロー）
　ブラジルへ出向中
東谷　宏（山の内ゴム）
　アメリカへ出張中
金守謙吉（日本火災海上）
　名古屋支店へ転勤
長井金二（先生）　定年退官にて
　石川県河北郡へ転居
津田　豎（前石川県大阪事務所長）
　本庁へ転勤
松波郁代　近く新居に移転
友栄　亨　妻スナック「奈々」を
　枚方市で開店
塚本靖彦（神東塗料）
　住友金属和歌山へ出向中
織田　潔（デサント社長）
　十一月十四日肝不全にて
　急逝　密葬に有志参列

任田静司君が「関西会の盛会を期したい」との乾杯で開宴、金沢からはるばる参加の普神貴行君より母校改築の状況や、近く迎える母校九十周年の記念行事の説明があり、この同期会の開催地を金沢・関東・関西と毎年各地持ち廻りの案を提案する。尚、宮川・園田君も挨拶にたち、新らしく赴任した浅川、寺野、田地君のスピーチがあって歓談。宴途中にて後輩の牧本喜代子、牧本雅子さんの参加あり、宴酣に「くいだおれ」の森田公子重役の唄等の余興で十時過ぎまで盛会。最後に校歌・応援歌の大合唱、亀田君の音頭で散会した。

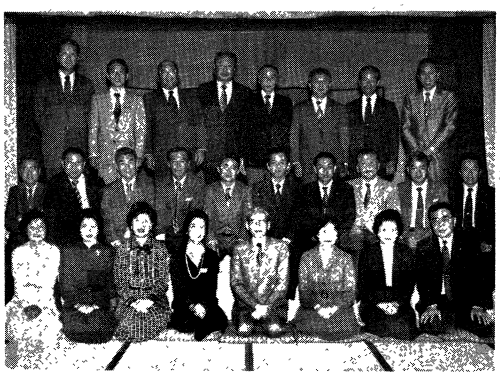
（蜷川俊則記）

出席者

浅川容弘　亀田　広　北川時男
北村正夫　犀川　久　嶋田勝次
田口裕子　田尻満穂　田地孝久
谷本慎吾　寺野敬之　任田静司
友江　亨　蜷川俊則　松波郁代
村上了太　金沢より園田和正
普神貴行　宮川栄一　飛入り
牧本喜代子（7期）牧本雅子（21期）

◇泉五期32Hクラス会

昭和二十八年泉第五期32Hの同窓会を卒業時の恩師竹田先生を迎えて久し振りに金沢市の料亭「大八」に於て昨年十月九日に催した。



参加者は県内から二十二名、遠く県外から三名を加えて計二十五名。今は遠く過ぎし青春時代の想い出を酒の肴にし大いに歓談し飲む、お互に量こそ異なるけれど共に白髪が混り、頭の話は禁句として懐旧談に花をさかせた。本当に懐しく、又楽しく、またの再会を約束し、皆帰路についたのは夜も更けた頃であった。

（西尾　記）

◇関西八泉会便り

皆様方のご支援に依り去る十月十八日、京都にて盛会裡に関西八泉会の会合が出来ました。嵐山の美観を眺め乍ら酒をくみかわすこと、只々爽快であります。

関西八泉会の連中は時々一堂に会して酒を飲み、揚句の果てはドンチャン騒ぎをしようと言う連中ばかりです。（小生も同様だが）飲むほどに当時の泉丘校が懐かしく、母校の変りゆく姿とふるさと金沢の街が眼にうつり感慨を覚えます。本部事務局には種々とお世話になり、今後もなんとかご協力を申し上げたく存じております。

（関西八泉会　山本他計志記）

◇泉丘十期生「泉寿会」幹事会

八月二十二日（土）午後七時より幸町「わかばやし」に於て泉寿会幹事会を、東京より二名を含む二十数名が集まり開催された。

創立九十周年に当る昭和五十八年に泉丘十期生は卒業二十五周年を迎えるので、記念行事として記念パーティーの開催を全員の賛同にて準備に取りかかる事を決定した。

尚、泉寿会の役員編成に当たり、会長に小泉重紀君を選出し以下役員を決定、会の運営にあたり年会費二千円の徴収と、会報「一泉」の配布・会則の作成を行うこととした。尚、二十五周年事業推進の一つとして関東泉寿会の結束を固めるため去る一月関東在住の会員の新年同窓会を催した。

（杉野　記）

七十才、弓道四段にみごと合格

美川町で薬局経営する泉尚栄さん（一中37期卒）が、さき程金沢市の県立武道館で行われた弓道審査会で四段に合格した。泉さんが弓道を始めたのは同町に弓道場ができた五十一年四月六十四才の時、旧金沢一中在学中「弓矢に触った感覚を思い出し」同町の弓道協会に加入したもの。入門したのが遅かったが昇段が早く五十二年に初段になり、ついにこの度は四段に合格した。「健康にはまず弓道」と同町弓道協会副会長として意気軒昂。町民に弓道を勧めている。

通信制「再押会」総会に参加して

通信制で昭和三五年から昭和四三年の間に卒業した人の有志で結成された再押会（マタオシカイ）通称サイオシカイがあります。会の名称は後輩の勤労学生を再び押し進める意味で、会員の内、松本、高瀬、太田、仕道氏の頭文字を取って名付けました。

さて、当会は毎年一月と七月頃に、家族や当時の恩師を招いて催されます。本年の標記大会は去る一月十日（日）内灘町大野の料亭「つたや」に於て開催されました。参加者は約二十名。久しぶりの再会に、又十数年ぶりに参加された方もいて、お互いの健勝を祝い、ふぐ料理に舌鼓を打ちながら、幹事さんの「酒は出さない」との通達からほとんどが車での参加だったが、初めから飲むつもりで、バスやタクシーで来た人は大いに飲み、カラオケを歌い、旧交を温めました。通信教育生時代の楽しかった思い出、スクーリングに、レポート提出に苦心したことなどを語り合い、県外へ行かれた方や結婚された方々が広く活躍しているとの情報等、又島田先生の昔懐しい「花笠音頭」も聴くことができ、本当に楽しい一時でした。

終って全員で記念写真を撮ったのですが、フイルムが終っていたそうで紙上に載せられないのが残念です。次回は夏に加賀方面の海岸で催される予定です。通信制卒業の皆さん、私達も一泉同窓会の一員としてお互いに頑張りましょう。

当日の出席者

島田先生、村上先生、豊原先生夫妻、松本進、松本隆、仕道義松、木村登、釜谷鉄山、中野正常（家族一同）、山前政行、広子（旧川辺）、佐渡紘一、千春（旧土屋）、野川勝三、室木康枝、川合久子（旧城見）、河原洋一　（通39年卒河原　記）

吉田一郎氏

金沢一中第十回卒（明治三十六年）の大先輩の吉田一郎氏がこの一月二十九日、心不全のため南熱海温泉病院にて死去されました。九十五才の高令で最後まで活躍をされ、一昨年の目黒の雅叙園で開催された関東一泉同窓会には元気なお姿で出席され、後輩を激励されたことが印象として深く残っている。

島野三郎氏

元満鉄調査部参事の島野三郎氏が東京の自宅にて去る一月二十四日急性心不全のため死去されました。同氏は金沢一中第十八回卒（明治四十四年）の先輩で、さきほど著書「哲学概論」「この目で見たロシア革命」他二冊のご寄贈をいただいたばかりで深く哀悼の意を表する。

◇「泉丘十七期生」第二回同期会開催さる。

泉丘三十九年度卒業生による第二回同期会が、さる一月三日、金沢ニューグランドホテルに一一五名（男性八十四、女性三十一）の仲間を集めて開催されました。さらに恩師山村、大田、柳田、高橋（正）の各先生方にもご出席いただきました。

この日は、昨年の豪雪とは様変りの好天に恵まれ、四年ぶりの同期会ということで、会場のそこここで、はなしの花が咲いていたようです。参加した仲間の大半が、今年の年男、年女ということで一層の飛躍を期し、さらに次回の再会を固く誓いあいながら盛会のうちにその幕をとじました。

（事務局　福田　記）

同窓先輩よりの著書寄贈つづく

昨年暮以来、引き続き同窓先輩の会員からその著書の寄贈が相つぎ、そのご厚意に深く感謝している。この貴重な本は将来、一泉文庫としてひろく同窓、後輩への文庫として管理し、公開したいと計画中であります。今回ご寄贈をいただいた方は左記の通り。

島野三郎（十八回）この目で見たロシア革命、哲学概論、永遠に転変する世界、雪の征服者
高原武臣（二十七回）万葉語遍歴
山森青硯（三十三回）
　加賀藩社会福祉史
浦　茂（三十四回）
　新現代石川の百人
青戸泰賢（三十八回）
　金沢の季譜、北の都の物語り
寺内良雄（四十六回）
　愚満抄（中村岩次郎伝記）
金沢一中46期生記念事業委員会
　厳霜烈日
梅林　清（四十六回）
　こく象のたわごと
高橋三郎（泉七回）　山路遙かに
宮崎正昭（泉九回）
　倉庫精練株式会社々史
茶谷十六（泉十一回）安家村俊作
　日本の子どもに日本の歌と踊りを、東北民衆と闘いと文化二部

同窓会通信

◇母校記念祭ひらく

第三十三回創立記念祭が日時を繰上げ、去る九月十八日より三日間、テーマを「今、変革の時」として催された。

記念式典に続き、名古屋大教授の横越英一氏（第四十五回卒）の記念講演が行われた。内容は本校の伝統の深さを感じさせるすばらしい講演であった。各教室では今年も各種文化部、クラブの発表展示が盛んに行われ、各模擬店、喫茶、パーラーも大繁昌で人気を呼んだ。

最終日の仮装大会、野外劇は、会場は笑いと拍手にどよめき、日曜日とあって本校生以外の一般の観客も多く、素晴しい演技に拍手をおくっていた。

記念式以外はすべて生徒の手によって運営され、往時の記念祭と異なり時の移りをまざまざと感じさせられる。

◇泉丘校創立三十三周年記念講演会開く

例年十月十五日、旧金沢一中時代より続く、この創立記念日は泉丘創立三十三周年にあたり、この記念行事として式典のあと記念講演が先輩の名古屋大学教授横越英一氏（一中四十五回卒）によって行われた。かねて、この学校に学んだ横越氏が、在学中の思い出を中心とし「時の流れの中の泉丘」と題し、現代の若者の学生気質についての講演に講堂をうめた生徒に深い感銘を与えた。この講堂も、この講演を最後として近く取壊しにかかる予定である。

◇泉丘新校舎

特別教室棟が完成

五十五年の八月から旧校舎の一部取壊しが始まり、全面改築の第一歩を踏み出した工事も、昨年九月上旬、特別教室棟がその偉容をあらわして完成した。鉄筋五階建の堂々たるこの建物は、一歩中に入るや新装と共に明るく清潔感にあふれている感じである。

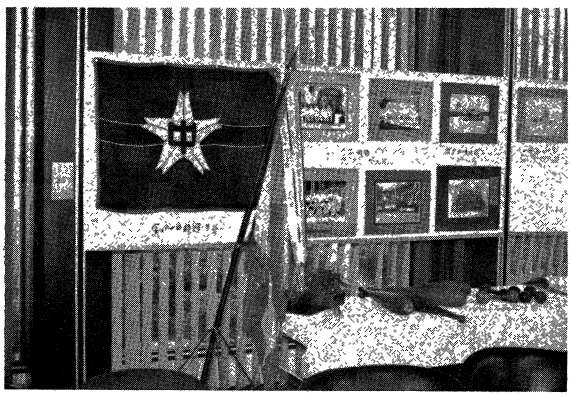
一階は家庭科関係、二階は生物関係と中会議室、三階は化学、四階は物理、五階には地学関係の教室がずらりと並んでいる。何れの教室も設備が調い、格調の高い日本でもまれな近代的な校舎である。九月下旬から使用が始まり、生徒はこの明るい環境の中でノビノビした勉強ぶりが見られている。

◇北陸銀行泉野支店にて一中・泉丘展ひらく

泉野台に支店をもつ北陸銀行泉野支店では支店長藤原義丈氏の強いご要望で、長い伝統ある旧金沢一中、現泉丘高校の歴史展を開きたいとのお申出があり、創立九十周年を目前にひかえたこともあり、同行のご趣志に賛成して一中・泉丘校展をひらくこととした。

十月一日、同行のロビーに、旧一中校旗及び現泉丘の運動部に贈られた優勝旗を軸に明治二十六年創立当時の「入学生一覧簿」以下大正・昭和に至る間の資料、運動器具五十点余を陳列公開した。同行を訪れる本校関係の父兄は勿論一般の人々にも珍しく見られて大好評を博した。

当初十日間程の予定であったが関係者の要望もあり約一ヶ月の展示となり、十一月十日まで延期され多大の成果を得た。

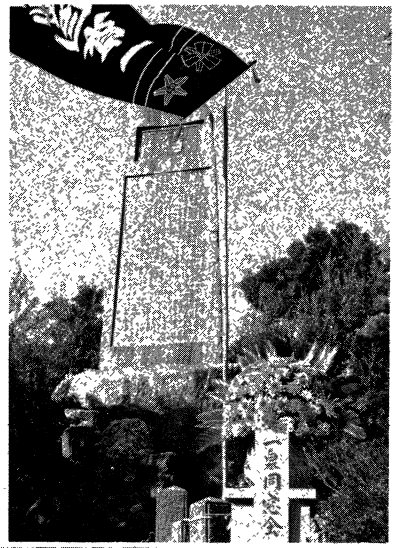


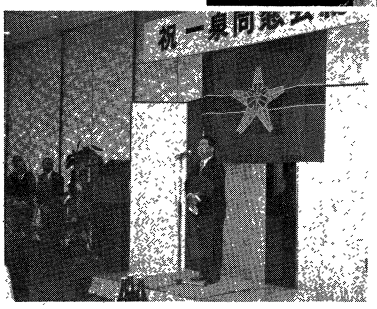
本部・支部だより

◇五十六年度一泉同窓会総会ひらく

旧金沢一中、泉丘高校の創立記念日にあわせて十月十五日、昭和五十六年度総会をひらく。

快晴に恵まれたこの日の午後、恒例により厳霜碑前に同窓会の宮太郎会長、大高泉丘校長をはじめ三十名の同窓先輩が集り、石浦神社宮司の司祭のもとに戦没者他、当校出身の物故者に対する慰霊祭を執行した。





秋晴の空に同窓会ののぼりがひるがえり、祭壇に各自が玉串を捧げてそのめい福を祈った。

午後六時、会場を金沢ニューグランドの会場に移し、宮太郎会長の開会の挨拶から始まった。

大高校長の学校の改築状況に続き関東、関西、東海各支部の近況、及び会計報告等があり祝宴に移る。

集う会員は元教師宮沢先生を始め百五十名余。旧友との懐古談に花がさき、いつもの同窓会風景で賑わった。最後八時に校歌の斉唱万才にて閉会した。

◇松任一泉同窓会の名簿が出版される

昨年春、林繁夫氏（一中四十四回卒）が会長となり結成された松任一泉同窓会が半歳余をかけて作った会員名簿がこの程出来上った。

同名簿は事務局の青木桂生氏はじめ幹事の者が綿密な調査のもと作成されたもので、会員名の住所、職業が記され関係者に配布された。

松任一泉会では、この名簿作成を機として愈々団結し会員相互の親睦をはかりたいとしている。

泉丘十期生関東泉寿会

関東泉寿会恒例の新年会を一月二十四日、赤坂ホテルニュージャパンにて盛大に行ない、在学中化学担当の山崎裕先生をはじめ、金沢からも泉寿会役員四名が参加、なつかしい顔ぶれと話題で楽しい一夜を過した。

関東泉寿会会員も百名を超える大世帯に発展し、来年は卒業二十五周年を迎えるにあたり、今後益々の団結と発展を誓い合った。

卒業十七回迄の再調査について

最近西多事務局長に依って、第一回から第十七回迄の卒業生名簿が古い資料の中から見つけられました。これは明治四十四年に作成されたもので、この資料を頼りに第十七回迄の不詳の方々の消息調査に刮目すべき成果が上りました。それは、一泉四号に載せた表と本号の表とを較べてご覧になれば一目瞭然でしょう。只残念な事は、すべて逝去が判っただけで、われわれが心から祈っていた健在でおられる方の確認は遂に一人もおられませんでした。

次に調査に関する若干の事を記します。

一、一泉同窓会の最高令者であられる第九回の清水与七郎氏につぐ高令者であった第十回の吉田一郎氏が今年一月二十九日に逝去されました。九十五才でした。

二、調査の進捗した事もあり、不詳者のない期が新たに第九回、十五回、十七回を合せこの表で五期になりました。

三、現名簿に記載の方で前述の卒業名簿に記載されていない方が十七回迄に四人居られ、之等の方々はその後附加された資料に依る調査もやり尽した現在、追跡調査は今

の処不可能の状態です。

四、この外関東大震災、今次大戦の戦災等で戸籍資料の煙滅された方が北海道を含めて三人あり、之も追跡調査不可能と判りました。

五、一泉三号の「ある追跡調査」の文中、第二回生の福田十太郎氏の養母の方が「福田福田」という珍らしい名前で難読と書きましたが、偶然他の文献で「フクダフデ」とおよみするらしい事が判りました。

又、同じ文中、第七回卒の陸田駿氏のよみ方も「ムツダ」「リクタ」とのみ思って何れも壁にぶつかり、最終的には確認出来ませんでしたが「クガタ」とおよみするらしく、こうなると手がかりがある様な事が判りかけて来ました。しかし厚生省資料で既に亡くなっていることが判明したので只今は追跡を中止しております。

六、どこから追跡しても難行している方が二人おられます。

一人は第十三回の尾本清三郎氏で、北海道の利尻島、夕張市、新潟県佐渡と舞台が広く、どうしてもこの三地点が結びつきません。

他の一人は第十六回の志筑岩雄氏で、姓は「シズ」とよみ、全国的にも珍姓です。出身は東京の士族の方で、東京、茨城県鹿島郡に同姓が夫々一軒ある事が判り訊ねましたがこの方々との縁はないと判り、今の処五里霧中です。

どなたでも良いヒントをお寄せ下さい。

（平石記）

数え年82才以上の卒業生の調査

（57.3.10現在）

卒業年次	卒業回数	（多分）数え年（才）	53年10月の名簿上の現存者総数	左の内現在健在を確認した人数	53年10月以降の調査で逝去の判った人数	差引現在不詳者数	摘要
明治27	1	105					全員逝去
28	2	104					
29	3	103					
30	4	102					
31	5	101	3		3		
32	6	100	12		12		
33	7	99	11		11		
34	8	99	24		24		
35	9	98	17	1	16		不詳者無
36	10	97	27		25	2	
37	11	96	29	1	25	3	
38	12	95	29	1	28		不詳者無
39	13	94	24		21	3	
40	14	93	37	2	33	2	
41	15	92	38	5	33		不詳者無
42	16	91	43	1	39	3	
43	17	90	39	9	30		不詳者無
44	18	89	51	17	25	9	
45	19	88	54	9	32	13	
大正2	20	87	26	9	16	1	
3	21	86	41	12	23	6	
4	22	85	35	15	17	3	
5	23	84	33	8	11	14	
6	24	83	30	10	10	10	
7	25	82	59	25	34		不詳者無
合計			662	125	468	69	

五十六年度 同窓会々費を納入の期

（57・1・30現在）

回	委員	回	委員
22	四井 謙次	49	斉藤 弥吉
26	花岡 虎三	50	浅香 正男
27	鏑木 政岐	52	寺窪 三郎
29	野口 錬雄	53	土橋 寛美
32	吉田 直茂	54	矢来 正
33	藤田 誠一	55	川北 篤
34	紙安栄次郎	56泉2	普神 貴行
35	木下 久雄	58泉4	宮下 明
37	竹田 長松	泉6	中谷 道子
38	加藤 俊男	7	水谷 昭
39	山瀬 芳男	8	福田 太睦
40	小堀 宏	10	杉野 好宏
41	牧沢 善二	13	本野 雅隆
42	井口 鉄男	15	成瀬 厳
44	吉村 正信	17	福田 雅幸
45	石崎 皓三	30	高島 太
46	太田 定夫	通	木村 登
47	大蔵 吉夫	通	釜谷 鉄山

以上の各期から本年度一泉同窓会の運営資金として金一万円の会費の納入をいただきました。当会の事情ご了察の上、今後ともご協力のほどをお願い申します。（事務局）

「さよなら金沢一中・泉丘旧校舎」の写真を引きつづき販売中

昨年春「一泉」第三号誌上にてご連絡いたしました旧泉丘校舎の航空写真はかつて同校舎にて学ばれた人々に好評を得ました。ご要望もあり引き続き販売をいたしております。当本部までお申込み下さい。

石川県立 一中 泉丘 高等学校 校舎 昭和55年7月撮影

定価一部（四枚組）一〇〇〇円
（一部のみ入用の方は 送料共一、一〇〇円）
郵便貯金振替 金沢〇―四二五四番
一泉同窓会 宛

あとがき

同窓会の機関誌として「一泉」を発刊して、こんど第五号を皆様のご協力にて発刊することが出来ました。

原稿の依頼にあたっては、日常ご多用にも拘らず心よくお引き受けをいただき感謝をいたしております。つとめて各期の動勢をお報らせして

・本誌発行の目的の皆様との交流の一助にもなればと念じております。

今後、各位よりの益々のご支援をいただき、この「一泉」が長く続くことが出来るようご協力をお願い申し上げます。

尚、各期の催された同窓会等のご投稿を是非お待ちいたしております。

（事務局 西多記）